

龔開の制作とその受容について 一大阪市立美術館蔵「駿骨図」を中心として

森橋なつみ（大阪市立美術館）

現在、大阪市立美術館が所蔵する「駿骨図」（以下、本図と称す）は、宋末元初に活躍した龔開（1222-1307）の代表作の一つであり、神駿の異相である十五の肋骨をあらわした瘦馬を描く。元・湯屋『画鑑』には同図についての記載があり、画家の得意とした主題として在世時より高く評価されていたことがわかる。龔開の作例は、本図や「中山出遊図」（フリーア美術館蔵）に見るように、彩色を用いず黒々とした墨で異形の姿をとらえた画とそこに添えられた自題の内容から、先行研究においては宋遺民として過ごした龔開の悲憤や皮肉が読み取られてきた。ただし、遺民としての龔開の自己表現という解釈が中心的で、在世時にいかに評価され、受容されていたかについては、いまだ検討の余地を残しているといえる。

本発表は、龔開の作画が同時代にどのように受容されていたかを明らかにすることで、本図の特質を再検討するものである。とくに売画生活を送ったという龔開の作画については、画家と社会との接点の中で捉えなおすことに一定の有効性があると考えられる。画家の制作が受容者（鑑賞者）との関係性の中で企画・表現されるという観点から、遺民絵画とよばれる本図の絵画史上への再定位を試みたい。

発表においては、まず、絵画伝統における本図の位置を再確認する。湯屋『画鑑』に「画馬は専ら曹霸を師とする」とあるが、本図は曹霸の画馬に直摸的に倣うものではなく、龔開の解釈を示すものと考えられる。唐の曹霸や韓幹、宋の李公麟、また同時代の趙孟頫や任仁発（1254-1327）など主要な作例との比較をおこない、当時主流であった画馬の系譜と本図との差異を見定めたい。

そのうえで、龔開の活動の場や交友、同時代の評価をたどり、本図の受容者について検討する。遺民画家として龔開は、銭選（1239-1301頃）や鄭思肖（1241-1318）らと併称されるが、彼らは必ずしも一様ではない。銭選は元に仕官した士大夫らと交わりをもって社会に順応し、復古を唱えて当時の画壇を牽引したが、一方の鄭思肖は激烈な抵抗意識から元朝にかかわる者と交際を断ち、遺民としての自意識を強く反映させた無根蘭を描きつづけるなど個人的な制作に終始した。龔開の場合、前朝に殉じた義士の伝を記すなど遺民の自覚を持ちながら、趙孟頫（1254-1322）ら元に仕官した者とも交友をもち、さらにその画風は当時の画壇と一線を画した。

また、受容者とのかかわりにおいて、龔開が淮陰（江蘇淮安）の人であることから、方回（1227-1305）が「龔侯之先楚両龔」（「玉豹図」『趙氏鉄網珊瑚』卷十二）とするなど漢代楚国の両龔（龔勝と龔舎）に比される点も一考を要する。題跋上では、しばしば龔開を「楚龔」と呼んでおり、鑑賞のうえで意識されていたものと考えられる。以上の点から龔開の作画について考察をおこない、遺民の絵画とその受容について、一端を明らかにしたい。